



©石田啓子／西村春彦

2月3日の開設記念レセプション：左から長嶺、クレヘンビュールICRC事業局長、明石康氏、緒方貞子氏、近衛忠輝日本赤十字社社長

読者の皆様へ

この度、駐日事務所より ICRC 広報の初回版をお届けできることを大変喜ばしく思います。ICRC の長年にわたる宿願であった駐日事務所設立に尽力したクアラルンプール地域代表部、またご支援頂いた外務省と日本赤十字社の皆様にここに改めて感謝申し上げます。60年ぶりの日本駐在が赤十字思想誕生 150年という記念すべき年と重なったのも嬉しい偶然です。

ICRC は、現場主義の人道機関として主に紛争で疲弊した国々に代表部や事務所を構えています。第二次世界大戦下で設立されたかつての駐日代表部は、捕虜収容所の訪問や戦争の犠牲者、特に広島島の被爆者に対する支援が主な任務でした。以来二度目の駐日事務所開設となる今回、ICRC の活動の意味合いは大き

く異なります。かつて戦争で廃墟と化した日本は経済大国として見事に立ち上がり、今ではともに人道活動に携わる心強いパートナーとなっています。

駐日事務所の活動範囲は多岐にわたります。まず、外務省や防衛省との関係をより強化すること。次に、日本赤十字社とともに赤十字運動を推進していくこと。そして、ICRC の活動に対してより多くの人々の関心・理解を促すこと。日本人の ICRC 職員を紛争現場へ送り出すことも重要な役割の一つです。

ICRC の任務を終え帰国した日本人は、現地における経験は人生において大きな転換期になった、といいます。紛争被害者と接することやそうした人々の生活向上に協力することは、まさにかげがえのない経験です。今回の ICRC 広報には、日本赤十字社医療センターの産婦人

科医の菊地真紀子さんとパシュトー語通訳の藤井卓郎さんによる、アフガニスタン活動記があります。現場の生の声に触れて頂くことで、ICRC の活動の真髄をご理解頂き、今後より多くの日本人が人道支援に関心をもって頂くことを願ってやみません。

ICRC と日本赤十字社は 2009 年、赤十字思想誕生 150 周年を記念して「Our world. Your move.」キャンペーンを実施しています。苦しんでいる人びとを救うため、私たち一人ひとりが責任ある確かな行動をとる必要がある——このキャンペーンを通じて、様々な形で「参加」と「行動」へのメッセージを発信できればと思っています。

長嶺 義宣
赤十字国際委員会 (ICRC)
駐日事務所所長

紛争の現場から

ICRC は世界のおよそ 60 カ国に拠点を置き、80 カ国以上の国々で暴力の犠牲となっている人々を支援・保護しています。このコーナーでは、人道危機が著しい地域に焦点を当て、現地の最新情勢と ICRC の活動を紹介합니다。

スリランカ



©ICRC/McGoldrick Claudia

人と物資の安全な輸送のため交渉するICRC

紛争状況は政府とタミル・イーラム解放のトラ (LTTE) の各支配地域の境界周辺で特に深刻化していて、食料や緊急救援物資の支援および人の移動において ICRC は重要な役割を果たしています。

20 年以上続く紛争は東部から北東部のバンニ地方へとシフトしています。LTTE 支配下に置かれていたこの地方は 2008 年 6 月にスリランカ政府軍によって制圧され、8 万人もの国内避難民を生み出しました。しかし、人々の移動は制限され、安全な場所に逃げることもままならない状況です。

現在、人道支援を行う団体は物資調達など現地のニーズに応じた活動ができず、国外退去を余儀なくされるどころも出てきています。

ICRC は政府の要請により、スリランカ赤十字社と協力して持続的に人道支援を行っています。2009 年 2 月より避難民に対する支援を開始し、4,000 人以上の病人や負傷者を避難させました。また 2 月中旬以降は、政府や国連世界食糧計画 (WFP) から支給される 700 トン超の食料を 12 回にわたり供給・運搬しています。増加する国内避難民や帰還民に対しては、今後も生活必需品の供給、衛生管理、生活環境の整備など、多角的な支援を続けます。

また国際人道法の見地から、一般市民の保護も引き続き重要課題の一つとなっています。支援活動のみならず、抑留された人々を収容所に訪ねたり、紛争で離れ離れになった家族を再会させたりといった保護活動も、ICRC 事業の根幹として重要な役割を果たしています。

ソマリア

20 年以上にわたる紛争でソマリアの治安は悪化し、無法状態が深刻化するなど、人道危機が広がっています。それに加えて、近年の干ばつと食料や燃料の高騰が状況をさらに悪化させ、何百万人ものソマリア人が人道支援に頼っています。

ソマリア中部のカルダダッド地方には、2009 年初めの激しい戦闘によって故郷を後にせざるをえなかった何万人もの人々が暮らし、避難所や安全な飲料水、食料の確保すら事欠いています。

一家と離れ離れに暮らす老齢の女性、ファデュマ・マーマッドさんは安全な場所を求め国内を転々としています。「私たちは 2 年前にモガディシオから中部にやってきました。少しは暮らしが楽になるかと思っていたけれど、やがて干ばつや紛争の拡大で生活が脅かされました。逃げ惑う日々が続いています。故郷に帰るなんて夢のまた夢になりました」。

ICRC は 1977 年よりソマリアで活動を展開しています。

紛争や自然災害の被害にあった人々に対し緊急救援を行い、また、応急措置や基本的な健康管理、負傷者・病人を治療する医療プログラムを大規模に展開しています。情勢が不安定な地域の経済状態の改善を目指し、農業や水のプロジェクトも中期的に行っています。

ICRC はソマリア赤新月社に支援のノウハウや知識を提供し、連携して人々の救援にあたっています。

アフガニスタン

武装勢力と政府軍・多国籍軍の対立構造を持つアフガニスタンの紛争は、34 県中 9 県を除く 25 県で激化していて、一般市民は極めて危険な状況にさらされ

ています。

ICRC は国内での様々な問題に対処すべく、アフガニスタンでは主に以下の分野で活動を展開しています。

- ・国際人道法に基づいた一般市民の保護
- ・緊急救援とリハビリ事業
- ・収容所の訪問
- ・離散家族の再会支援事業
- ・水資源の確保と管理
- ・生活環境の整備など

ICRC は今後、特に南部における支援を強化していく予定で、国外追放を受けた人々を支援する医療機関 (在カンダハール) を 12 から 15 に増やし、新しい事務所も近くヘルマンドに設けます。ICRC の事務所はこのほかにも西部フアラールと北東部マイマナに設けられ、西部バディスにも近々開設されます。

また、中部ワルダクには ICRC 救急処置施設が新たに設けられ、これにより計 5 つの緊急処置施設が同国内に展開されることとなりました。ICRC はまた、1988 年以来紛争で負傷した人々に対して義肢制作を含むリハビリ事業も行い、人々の社会復帰を促しています。

アフガニスタンでも収容所訪問は ICRC の主要な活動です。NATO 主導の ISAF や米軍、アフガン当局の管轄下に置かれている抑留所などでは、抑留者が人道的に扱われているかを確認します。2009 年 2 月には、逮捕された 114 人の処遇について調査しました。また家族の再会支援事業では、2009 年 2 月の一カ月間、バグラム空軍基地内の抑留者とその家族に対し、計 172 回のテレビ電話による面会を実現させました。



©ICRC/KEUSEN, Robert

テレビ電話で面会する抑留者の家族

私とICRC

いまこそアフガニスタンで、ICRCの出番

藤井 卓郎

カブール事務所 保護活動部門
バシュトー語通訳

9年前、私が初めてアフガニスタンに入ったのは、ちょうどタリバン政権が大仏を爆破したりしていた頃でした。治安こそ概ね安定していましたが、大干ばつと貧困、国際社会からの無視の中で喘いでいました。首都カブールでも人々は家の窓にガラスを入れるお金もなく、ビニールを張っていましたし、あたり一面広がる瓦礫の山は戦争の悲惨さを物語っていました。

アフガニスタンの和平プロセスに関する合意（ボン合意：2001年12月）成立後は何百万人もの難民が帰国し、都市にはきらびやかな建物が立ち並ぶようになりました。しかし「ポスト・コンフリクト（紛争後）」のモデルケースであったアフガニスタンは、いつの間にか再び「紛争中」になってしまい、民衆は再び漆黒の闇の中でのた打ち回っているようです。

アフガニスタンはICRCの事業にとっても新しい時代を開く、最先端の紛争現場なのかもしれません。冷戦後、紛争の多くが内戦であり、9/11の後は「テロ」のネットワークとの世界的闘いを叫ぶ「とけの声」の中で、国際赤十字・赤新月社運動の出発点である国際人道法（ジュネーブ条約など）がもう時代遅れになったという考えが囁かれたこともありました。その中で、抑留者収容施設を地道に訪問し続け、人道の灯をともし続けてたのがICRCです。紛争の激化に伴い、ICRCは今この国で紛争被害者の生計支援、医療支援事業を拡大しています。悪化していく一方の治安情勢の中で活動を拡大できるのも、一貫して不偏不党の立場を守ってきたからであり、現政権そして反政府武装勢力双方から受け入れられているからです。今では紛争で亡くなった人の遺体や誘拐被害者の身柄の引き渡しなどは、中立の立場を貫くICRCの仲介抜きには考えられなくなっています。

私が関わっている「紛争における非戦闘員や抑留者の保護」の活動は他の組織があまり行っていないことから、ICRC



高台よりカブールの街を望む。子供達と

ならではの活動と言えるでしょう。

その一環としてアフガニスタン政府や外国軍の運営する留置場、刑務所、抑留施設を、「今週はここ」「来週はあちら」というように訪問しています。私はその訪問チームの一員としてほとんど毎日どこかの施設を訪れます。抑留者に対する非人道的取り扱いや、法的権利や手続き上の権利が保障されているか、施設の物理的条件、病人や怪我人に適切な治療が行われているかを調べ、施設の責任者に改善すべき点を非公開で勧告します。

ICRCは紛争被害者や抑留者に直接会い、彼らの訴えに耳を傾け、紛争当事者や抑留施設管理者との信頼関係を構築し、非公開の対話と説得を通じて状況の改善に努めます。この方法は地味ですが、最も地道なやり方です。人道の一点に目を向け、特定個人の罪の有無を超えたところで活動しているのです。

緊急を要する場合、ICRCから入所者に毛布、衣類、バケツ、石鹸、タオル等の物資支援や、施設の修繕を行うことも

あります。また抑留者と直接会う中で、施設外の家族との連絡を可能にする手紙（赤十字通信）のほか、短いものであれば抑留者からの家族への伝言も届けます。米軍の運営するバグラム空軍基地内にある抑留施設では、家族と抑留者の面会もICRCの仲介で行われています。

私が抑留者からのメッセージを家族に伝えるとき、とても感謝されることがあります。そんなときは仕事の疲れが吹き飛んでしまうほど嬉しくなります。先日あるお宅に電話して、抑留者の父親に息子からのメッセージを伝えました。「自分は元気だから心配しないように」とのメッセージを聞いても安心できない父親は、「息子は元気だったか」「病気をしていないか」を繰り返し私に尋ねるのです。そして最後は息子のために祈り、ICRCの活動でどれだけ助かっているかと、感謝の言葉をくれたのでした。

苦しんでいる人々と心を通わせることは私の日々の励みであり、そしてICRCの底力だと思えます。

国際赤十字ニュース

ICRCの要請を受け、アフガニスタン・カンダハールの病院で半年間勤務

アフガニスタン南部のカンダハールは今もなお治安が不安定です。社会的弱者である女性や子供達が最も困難な生活を強いられています。妊婦さんを取り巻く環境は劣悪です。出産年齢にあるアフガン女性の死因の約半数は妊娠出産に関連しており、また、子供の4人に1人が5才の誕生日を祝う前に命を落としていると言われていました。

カンダハールにあるミルワイズ南部地域病院は、南部5県の住民360万人の保健を担う唯一の公立総合病院です。ICRCは紛争犠牲者支援を目的に1996年より同病院の外科部門へ支援を続けてきました。2006年からは、女性や子供達への支援をさらに広げるため、同病院産婦人科および小児科部門へ支援を開始しました。産婦人科医師である私は、現地の医療スタッフと協力し同産婦人科の医療サービスの質を改善するため、2008年10月より約半年間にわたり、ICRC保健要員として活動しました。

現場で目のあたりにしたのは、妊婦さんや赤ちゃんを取り巻く非常に残酷な現実でした。大量出血・けいれん

発作・子宮破裂・重症の感染など今の日本では考えられない理由で担ぎこまれる妊婦さんの多くは、お腹の赤ちゃんとともにすでに瀕死の状態でした。現地スタッフとともに懸命に救命を試みる毎日が続きましたが、残念ながら、失う命もありました。だからこそ、元気に生まれ出る命、その命を胸に抱く「母親」の尊さを今まで以上に強烈に意識させられました。

女性と赤ちゃんの健康を取り戻すために必要なのは何か。その問いが私の心から離れることはありません。病院の機能を高め、治療が必要な人々に適切かつ迅速に医療サービスを提供できるようにすること。もちろんそれは不可欠です。治安が安定し、人々が死の恐怖から解放されて生活するようになること。極度の



貧困が改善され、人々の関心が健康に暮らすことに向かうようになること。たとえ時間がかかっても、これらの取り組みなくしては、アフガンの人々が“健康に生きている”実感を持つことはできないでしょう。

菊地 真紀子
日本赤十字社医療センター
産婦人科医師

写真展 **OUR WORLD AT WAR** ～「戦い」を生き抜く人々～

ICRCは赤十字思想誕生150周年を記念し、世界的に著名なフォトジャーナリスト集団「VII (セブン)」とのコラボレーションを実現させました。写真界で数々の受賞経験を持つカメラマン5人がICRCの活動地のうち8カ国^{*}を訪れ、性的暴行により心に傷を負った女性や、住む場所を失った一家、そして犯罪集団の暴力に脅かされている人々の姿に迫ります。

^{*}アフガニスタン、コロンビア、コンゴ民主共和国、グルジア、レバノン、リベリア、ハイチ、フィリピン

地球上のあらゆる非行を“記録”し続けるフォトジャーナリスト達が捉えた21世紀の現状、そして、それら記録の断片から発信されるメッセージを心に焼き付けて下さい。

●2009年5月8日(金)～14日(木) 日本看護協会
10:30～18:30 (15～29日まで一部展示を続行：平日17:00まで)
東京都渋谷区神宮前5-8-2 Tel: 03-5778-8831

●2009年5月19日(火)～31日(日) JICA地球ひろば
10:00～20:00 (土・日・祝日18:00まで、5/31は12:00閉館)
東京都渋谷区広尾4-2-24 Tel: 0120-767278 *月曜休館

主催：ICRC、日本赤十字社、日本看護協会



ICRC

ICRC駐日事務所

住所：〒105-0021

東京都港区東新橋2-9-3 ラ・ピアッツォオーラ6階

TEL：03-6459-0750 / FAX：03-6459-0751

E-mail：tokyo.tok@icrc.org / Website：www.icrc.org

 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society
Website：www.jrc.org